

I 研究の経過

本校は、昭和53年4月に開校し、本年度で13年目を迎える精神薄弱養護学校である。開校以来、「表現化に視点をあてた教育過程の編成・実践」、さらに「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」と研究主題を掲げて教育実践に取り組んできた。昭和60年度に、現在の「発達と障害に応じた教育をめざして」という研究主題が設定され、その後、副題を発展させつつ研究実践し、今日に及んでいる。年度を追って、今までの研究経過を概観したい。

1 昭和53年度の研究

教育目標が「積極的に参加しうる人間の育成」と定められ、その教育内容の選定について検討された。教育内容は、「自立化」「社会化」「表現化」「職業化」の4つの柱をもとにまとめられ、現在の段階別教育内容表の原型が作成された。この年は、教育内容表の一層の充実が期され、研究主題も「表現化に視点をあてた教育過程の編成」と設定されて、研究が進められた。

2 昭和54年度の研究

昭和53年度に作成された教育内容表及び年間指導計画表をもとに教育実践がなされた。研究の副題が「社会的自立を目指す学習指導の研究」と設定され、各学部で「表現化」との関わりを基本とした指導内容、指導法の研究が行われた。

3 昭和55年度の研究

昭和54年度の研究実践が引き継がれ、指導内容、指導法についての研究が進められた。さらに評価についての研究がなされるとともに、各学部の特色が一層明確化された。

4 昭和56年度の研究

生きていくための生活の基礎づくりに始まり、集団生活への適応、さらには社会的・職業的生活への発展といった学習内容の段階的発展性の問題が研究の中心課題とされた。特に重度・重複化に対する指導内容が検討され、教育内容表が改訂された。

この年度をもって、「表現化に視点をあてた教育課程の編成・実践」の研究に一応の区切りがつけられた。

5 昭和57年度の研究

前年度までの研究の成果を継承するとともに、さらに新しい視点を加えるという方針に基づき、新しい研究主題が模索された。その結果、①体力・気力の育成②養護・訓練の充実③感受性を育て

ることの3つの視点の柱を包括した「豊かな心をもち、たくましく行動する子」という新しい研究主題が設定された。前期は主題が設定され、その主旨の共通理解がなされた。後期は、実践に移行され、さらに研究が深められていった。

6 昭和58年度の研究

前年度において基本的な考え方が確立され、この年度より、実践へ移行された。小学部では生活単元学習を、中学部では生活単元学習と作業学習を、高等部では作業学習を中心として研究実践された。

7 昭和59年度の研究

前年度と同様、生活単元学習、作業学習を中心として実践が為されたが、その中で、個に合わせた指導の必要性を痛感するに至った。そこで、指導者一人ひとりが各児童生徒の課題を念頭に置いて実践研究に取り組んだ。

「豊かな心をもち、たくましく行動する子」という研究主題は、設定されてから3年目を迎え、いくつかの問題点はあるにせよ、一応の区切りがつけられることになった。

8 昭和60年度の研究

昭和60年度は、個に合わせた指導をさらに進めるために「発達と障害に応じた教育をめざして一個に視点をあてた指導の実践一」というテーマが設定された。児童生徒一人ひとりについて、そのニーズに応じた個人目標が設定され、その個人目標の達成をめざして研究実践が開始された。教師は、研究対象児を一人決定し、その対象児については、特に詳細に記録をとり、研究することになった。また、グループ研究会を発足させ、共通の問題を抱える教師が集まり、随時討議することによって、教師個人の研究の浅さや偏りが補われるように考えられた。

9 昭和61年度の研究

前年度の研究の構想に基づき、実践が積み重ねられた。全児童生徒の個人目標が見直され、研究対象児が新たに決められるとともに、研究グループも新たに発足した。60年度の反省に基づき、教師一人ひとりの研究が、独断や狭い教育観、指導観によって進められることがないように、個人の研究を学部と研究分野別グループの2つの集団で支える方法が試みられた。

10 昭和62年度の研究

この年度は、教師一人ひとりがそれぞれ研究対象児を決めて事例研究をするというこれまでの形式を発展させ、教師集団で研究対象児を追うという共同研究の方法が採用された。この方法によって、事例として取り上げられる実践例は減ったが、児童生徒をより総合的、客観的に観察して、より適切な指導ができたというところに成果をみることができた。

この年度で、「発達と障害に応じた教育をめざして一個に視点をあてた指導の実践一」を設定し、研究に取り組み始めてから3年目となり、いくつかの問題点を残しながらも、一応の区切りをつけることになった。

11 昭和63年度の研究

前年度までの研究の成果を継承するとともに、さらに新しい視点を加えるという方針に基づき、新しい研究主題が模索された。その結果、「発達と障害に応じた教育をめざして」という研究主題はそのまま継承し、そのアプローチの方法である「からだづくりを通して」という副題が新たに設定された。この年度は、全体で研究テーマ、取り組みの方法について共通理解を図り、その後、各学部単位でサブテーマを設定して研究実践に取り組んだ。

12 平成元年度の研究

この年度は、小学部、中学部、高等部の研究テーマの把握について再検討し、研究の構想図を作り直した。3学部の一貫性をもたせるため、実践研究の場、評価の観点、評価法など全学部で討議した。また、目指すからだ像について、小学部、中学部、高等部と段階的発展性を考えて設定した。

内容的には、前年度までは、体育（保健体育）、からだづくり養訓を中心としたからだに直接的にアプローチする実践の場に重きがおかれていたが、この年度は、生活単元学習、作業学習など生活場面でのからだづくりにも実践の場が広げられて取り組まれるようになった。

13 平成2年度の研究

この年度は、過去2年間に築いた研究の構想（研究の構想図、目指す児童生徒のからだ像の段階的発展性、実践の場の選定、評価の観点及び評価法）に基づき、実践の充実が図られた。具体的には、目指すからだ像に迫る授業づくりが主として単元・題材の選定と組み立てという観点から、また個を生かす指導の工夫という観点からなされ、さらに検討・修正されながら積み上げられた。

また、この年度は、実践の3分野の中でも「運動場面でのからだづくり」について、3学部の連関が図られ、その中でも、からだづくり養訓については、ねらい、運動内容、指導形態、指導方法について分析がなされ、段階的発展性が検討された。

14 平成3年度の研究

本年度は、研究テーマ「発達と障害に応じた教育をめざして―からだづくりを通して―」への取り組みの最終年次にあたり、①昨年度から本格的に取り組まれた目指すからだ像に迫る授業づくりをさらに充実させること、②評価法の再検討をしつつ、4年間の実践の評価をすること、この2つを念頭において研究実践がなされた。

小学部においては、特に授業を活性化させる媒体としての「遊び活動」について研究が深められ、中学部においては、特に単元を構成する一つひとつの題材について、興味・関心、取り組める幅の広さ、適度な負荷という観点から厳しい検討が加えられた。また、高等部においては、学習のねらいに沿った多様なグループ編成がなされるとともに、教材の選定及び課題の与え方についてもさらに検討され、より良き実践が指向された。